

感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(4): —“The Principles of Psychology”におけるJamesの感情学説の変化—

William James's theory of emotion as a pioneer work
of affective neuroscience, part 4

—Changes in the James's theory of emotion from 1884 to 1890—

佐藤俊彦*

Toshihiko SATO

1. はじめに

大学の教養科目、もしくは専門科目として心理学を受講した方であれば、James-Lange説についてお聞きになったことがあるかもしれない。仮に、学説の名称については失念していても、「クマを見て逃げるから怖くなる」、もしくは「相手を殴ることで怒りを覚える」(James, 1884)といった、常識的な考え方を逆転させたような言葉の表現を聞くと、そう言えば、そんな学説を聞いたことがあったなと、思い出される方もおられるかもしれない。

この学説に関しては、心理学の学説の中でも特に有名なものであるものの、最近の拙論(佐藤, 2022)でも指摘した通り、この学説の名称に姓を冠せられた2名の研究者、すなわち、William JamesとCarl Langeの考え方の間には共通点がある一方で、重要な相違点もある。さらに、Jamesの学説の内容と、Langeの学説に対するJamesの態度とに関しては、時間経過に伴って、ある程度の変化が認められることにも留意すべきである。だが、実際のところは、残念ながら、JamesとLangeの学説の相違や、Jamesの学説の経時的な変化について、詳細な検討を行ったり、具体的に解説したりしている文献は比較的少ないように思われる。

脳が身体活動全体を支配して制御するという、中枢機能を重視した立場から考えれば、「クマを見て逃げるから怖くなる」などという、骨格筋運動から感情体験が生じるという感情生成メカニズムの図式は、きわめ

て疑わしく感じられるかもしれないし、こうした常識的な因果関係を逆転させたような図式によって特徴づけられてきたJames-Lange説だけでなく、心理学史の中で、James-Lange説に続いて表れた、さまざまな感情の末梢説¹⁾に関しても、科学的な議論の対象とする必要があるのかとの疑問を覚える方もおられるかもしれない。

しかしながら、こうした学説は、感情の脳科学、ないし神経科学の発展に伴って、その存在意義が失われてしまったわけではない。感情の末梢説は、その具体的な内容を変えながらも、現代にいたるまで、感情の二要因説(Schachter & Singer, 1962)や、ソマティックマーカー仮説(Bechara & Damasio, 2005; Damasio, 1994)などのように、末梢活動からの影響を重視した感情理論が提唱されてきており、Wiens(2005)も指摘している通り、全身からのフィードバック作用と、こうした感覚の受容とが、感情体験の成立において、きわめて重要な役割を担っていると考えられてきた。

James-Lange説に話を戻すと、JamesとLangeは、19世紀後半において、感情生起のメカニズムに着目し、そのメカニズムに関する仮説を別個に構築した。感情心理学の草創期において重要であったJamesとLangeの学説に関して、両者の考え方の異同や、経時的な変遷も含めて、正確に理解することは、現在の感情心理学において重要な研究アプローチとなっている感情の末梢説が発展してきた歴史的経緯を理解することにつなが

る。その意味において、これらの感情心理学および感情神経科学の先駆者たちの考え方をすることは、現代の感情心理学や感情神経科学における理論的な枠組みや研究の方向性を理解するためにも、重要な意味を持っているのではないだろうか。

筆者はこれまで、William Jamesの感情学説に着目して、3つの拙論を著し、Jamesがこの学説を着想する基礎になった学術的背景(佐藤, 2021a)、この学説が最初に提唱されたときの論文の構成と、Jamesがもっとも主張したかったことは何だったかという点(佐藤, 2021b)、ならびに、Langeの学説(1885/1922)からJamesが受けた影響(佐藤, 2022)について議論してきた。

これらの拙論の中の第3編(佐藤, 2022)における議論とも関連して、本論においては、Jamesの感情学説が、1884年から1890年までの時期にどのように変化したかを整理し、そうした変化が生じた背景について考察を加えることとしたい。この議論の中では、Jamesの感情説に関する最初の論文であり、1884年のMind誌に掲載された論文(James, 1884; タイトルは“What is an emotion?”)の内容と、1890年に出版されたJamesの著作である“The Principles of Psychology”(James, 1890; 以後“The Principles”と略記する)の中の“The Emotions”と題された第25章における内容とを比較する作業を行う。上述の拙論(佐藤, 2022)では、JamesのThe Principlesの第25章において、Langeの学説の影響を受けたと思われる部分をいくつか指摘していたので、本論においては、Langeの学説の影響と考えられるところ以外の変更点に特に重点を置きながら、The Principlesの第25章の中で、加筆、ないし修正された要素を明らかにするとともに、それぞれの加筆や修正の背景について議論していきたい。

2. The Principles第25章の成立過程と内容の概要

The Principlesの第25章の内容に関する議論を始める前に、この第25章の成立過程について考えておきたい。この点を考察する材料として、最初に、Knight Dunlap(1922)が編集した1冊の本を紹介しておきたい。この本の中には、James-Lange説に関連した3つの主要な著作が掲載されている。この本に収録されている著作とは、1)1884年にMind誌に掲載された“What is an emotion?”というタイトルのJamesの論文、2)1885年に、“Om sindsbevægelse: Et psyko-fysiologisk studie”

(英訳: The emotions: A psychophysiological study)というタイトルを付されて、デンマーク語で刊行されたLangeのモノグラフの英語訳、ならびに、3)1890年に刊行されたThe Principles of Psychologyの中の感情の章(第25章)である。

この本の序文を編者のDunlap(1922)が記している。この序文の内容からは、本論の中で議論する内容に関連した重要な示唆を得ることができる。Dunlapは、本の序文の中で、上記のMind誌の論文と、The Principlesの感情の章の内容を比較して、次のように述べている。“In the chapter in the *Principles*, James repeated some of the material which had already been presented in the *Mind* article. It has however been deemed advisable to reprint the earlier article as well as the chapter. Historical considerations alone would warrant this, since the chapter is based both on the article and upon Lange’s monograph, and it is important to have these two independent foundations presented side by side.”(p. 5; 筆者訳: 心理学原論(The Principles)のこの章では、Jamesが、Mind誌に掲載された論文で記述していた内容に関して、あらためて述べている。だが、先行して発表された[Mind誌の(筆者注: 訳文における角括弧内の記述は筆者による補足である。以下同様)]論文を、[The Principlesの]当該章とともに再度刊行するべきであるだろうと判断した。この章に含まれる内容の多くは、この[Mind誌に掲載された]論文と、[1885年に刊行された]Langeのモノグラフの内容に基づいているために、歴史的に考察するにあたっては、両者を比較して検討する必要がある、これらの独立した構成要素を同じ場所に並べて示すことには、重要な意味がある。)

Dunlap(1922)の記述を読むかぎり、Principlesの第25章の内容は、Mind誌の論文をほぼそのまま踏襲した内容になっているわけではなく、Langeのモノグラフ(1885/1922)の内容を文中に適宜利用しながら、Jamesが、自らの感情学説の中に新たな内容を付加していたと考えることができる。

Dunlap(1922)は上述の内容に続き、さらに次のように述べている。“But there is a still more important reason, in that the *Mind* article gives a much more clear-cut presentation of the organic theory of the emotions than does the chapter from the *Principles*: and in the latter James concedes much more to the esthetic and spiritual emotion in the way of independence of somatic and visceral processes than he does in the former.

Whatever may have caused James to soften his views on this point, his first formulation of the theory is in this respect the more important.”(pp. 5-6 ; 筆者訳 : しかし、Mind誌に掲載された論文で述べられていた感情の身体論の内容が、The Principlesの該当する章よりも明瞭でわかりやすいものであったことについては、もっと重要な理由がある。前者[すなわち、Mind誌に掲載された論文]に述べていた内容に比べると、後者[すなわち、The Principles]において、審美的ないし宗教的な要素の強い感情が、身体活動、ないし、内臓活動とは独立であることを、Jamesはより明確に述べている。

Jamesの考え方の中で、この部分の議論が比較的穏健なものに変わってしまった理由が何であるにせよ、最初に論文として発表された彼の感情理論の内容は、この点を考える上で、いっそう重要になっている。))

Dunlap(1922)による上述した指摘に従えば、The Principlesの第25章の内容の特徴として、JamesのMind誌の論文(1884)の内容をある程度踏まえながらも、Langeのモノグラフ(1885/1922)の内容について補足的に利用することで、Jamesの主張を補強、ないし発展させようと試みた。それに加えて、理由は明示されていないものの、感情生起に関するメカニズムについての議

Table 1 James(1890)における主要な議論の内容と該当部分のページ番号(佐藤(2022)の内容を一部修正)

主要な議論の内容	該当するページ番号
◎(1) 本能 (instinct) と感情 (emotions) との関連(前章における本能に関する議論を受けて)	pp. 442-443
◎(2) 感情の身体反応に関する具体的な説明(Lange(1885)による悲嘆、Darwin(1872)による恐怖、および、Mantegazza(1885)による憎悪に関する記述)	pp. 443-449
◎(3) 感情の身体反応における個人差や多様性に関する議論、ならびに感情が生起する一般的なメカニズムを明らかにすることの重要性に関する指摘	p. 449
(4) 感情体験の成立過程に関する議論(粗大感情に限定)	
(A) 感情体験の成立過程に関する仮説 (感情体験に対する身体反応の先行性と因果性)	pp. 449-450
(B) 身体反応のさまざまな種類と感情体験に応じたパターン	p. 450
(C) さまざまな身体反応を素早く知覚できる	pp. 450-451
(D) 身体変化の知覚なしに感情体験は生じない(身体変化の知覚が必須条件)	pp. 451-453
◎(E) この学説は唯物論的一元論ではない	p. 453
◎(F) 感情をめぐる2種類の問題:感情表出の分類の問題と感情が生起するメカニズムの問題	pp. 453-454
◎(5) James学説を実験的に検証することの困難さ	pp. 454-456
(6) James学説への反論に対する議論	
○(A) 第1の反論とそれに対する回答	pp. 456-462
○(B) 第2の反論とそれに対する回答	pp. 462-466
○(C) 第3の反論とそれに対する回答	pp. 466-467
○(7) 繊細感情について	pp. 468-472
(8) 感情の中核は脳に存在しない	pp. 472-474
◎(9) 感情の個人差(感情的性質と想像力の個人差)	pp. 474-477
◎(10) さまざまな感情が生じる背景について	pp. 477-484
◎(11) 結語(感情の分類について)	p. 485

◎: James(1890)で新規に追加された部分; ○: James(1884)の内容の一部が追加された部分;

無印: James(1884)とほぼ内容が一致する部分

論の中に、審美的ないし宗教的要素の強い感情を、身体反応からの影響を比較的受けにくいものとして位置づけてしまったことにより、Jamesの感情学説における議論の明瞭さが、かなりの程度失われてしまった点があるとDunlapは考えたのだろう。

次いで、The Principlesの第25章における主要な議論の内容をTable 1に示す。この表の中には、Mind誌の論文との比較の結果、新たに追加された項目には二重丸、項目としてはJames(1884)にもあったものの、部分的に補足されている項目については通常の(一重)丸印を示している。

以下では、これらの二重丸および通常の丸印を付した項目にとともに、前後の章との接続部分についても取り上げて、Mind誌の論文と比較したときに、The Principlesの第25章にて新たに追加、または加筆された要素を明らかにしていきたい²⁾。

3. The Principlesの第25章で追加された内容

3.1 前章との接続(本能と感情との関連)

The Principlesの第24章、すなわち第25章の直前の章は、「本能」についての章である。おそらく、これら2つの章の前後関係とも関連して、第25章の冒頭には、本能に関する前章と接続するためと思われる、3つの段落が配置されている。

この第24章と第25章の前後の位置関係については、単なる偶然ではないだろう。Jamesが、本能の章のすぐ後に、感情の章を配置したことには、おそらく重要な意味があると考えられる。例えば、James自身が、イタリア語版の“The principles of Psychology”の序文(James, 1900/1981)の中で、次のように述べている。“Within our generation Darwinism has come and added its new insights to these older tendencies. It has cast a flood of light upon our instinctive and passional constitution, and has brought innumerable attempts at explaining psychological facts genetically in its train” (James, 1900/1981, p. 1483 ; 筆者訳: われわれが生きている時代には、Darwinの進化論が、[それまでの連合主義心理学のような]旧来の考え方に対して、新たな考え方を付与してくれた。そのおかげで、人間の本能や情念に関係した心の要素が研究の対象となって、多くの関心を集めており、その結果、心理的な事象を遺伝によって説明しようとする試みが数多く行われてきた。)つまり、本能と感情の研究は、ダーウィンの進化論の影響を受けて、心理学において新たに誕生した研

究領域であったということであり、Jamesとしては、進化論に関連した生物学的な観点から、これらの本能と感情という研究領域に関して、共通の生物学的な基礎に基づいて議論しようという考えであったのかもしれない。

そして、上述のような推測を裏づけるように、The Principlesの感情の章の冒頭では、“Every object that excites an instinct excites an emotion as well” (James, 1890, p. 442; 筆者訳: 本能を刺激するものはすべて、感情を引き起こす)と述べて、本能的な行動と感情表出との間の共通性を指摘している。

その一方で、本能と感情との相違点を指摘して、次のように述べている。“Emotions, however, fall short of instincts, in that the emotional reaction usually terminates in the subject's own body, whilst the instinctive reaction is apt to go farther and enter into practical relations with the exciting object.” (p. 442 ; 筆者訳: しかしながら、感情は、本能ほど広範囲に及ぶものではない。具体的に言えば、感情反応は通常、その当事者自身の身体の中に終始するものであり、その一方で、本能的な反応はさらに広範囲に及んでいて、刺激となる対象物に対して、実際に行動を起こして作用を及ぼすことが多い。)つまり、本能行動は、行動を誘発する対象に対して何らかの作用を及ぼすことを目指すものであるのに対して、感情とは一個人の中に生じた現象に過ぎないのだと言っているのであって、この区別は、感情現象に関するJamesの考え方を理解する上で、重要なポイントであるだろう。このように考えれば、Jamesの有名な文言である「(相手を)殴るから怒りを覚える」(angry because we strike; James, 1890, p. 450)とは言っても、相手を攻撃して打撃を与える行動自体は、感情反応ではないとも理解できる。

Jamesはさらに、“Its stimuli are more numerous, and its expressions are more internal and delicate, and often less practical.” (p. 442; 筆者訳: [感情反応を引き起こす]刺激の種類は比較的多いし、[感情反応の]表出は、内面的かつ繊細なものであり、外面的な[行動の]作用として表われにくいことも多い)とも述べている。Jamesによれば、感情とは、後述するように、身体活動を基礎にした機能であると考えられているものの、その一方で、内面的な現象でもあって、彼による感情の説明を見るかぎり、唯物論的な考え方からは、一定の距離を置いていると考えてよいだろう。

以上のような、感情の章の冒頭における議論の中

で、Jamesは本能と感情との間の共通点と相違点を説明している。こうした議論の内容を前提として、後述するような感情に関する議論が行われることになる。

3.2 感情の身体反応に関する具体的な説明

Jamesは、本能と感情との比較に続いて、Lange (1885/1922)による悲嘆、Darwinによる恐怖、および Mantegazaによる憎悪の感情反応の記述をそれぞれ引用している。これらの著者らによる感情表出の描写は非常に詳細である。最初に引用されたLangeによる悲嘆の反応に関する記述の中では、強い倦怠感や動作の緩慢さ、筋緊張の低下や前傾した姿勢といった骨格筋活動に関連した特徴に加えて、皮膚組織への血流低下によって顔面が蒼白に見えたり、肺の血流低下によって息切れが生じたり、脳への血流低下によって無気力や不眠などが生じるといった、血管系の活動に基づくさまざまな身体的変化が指摘されている。

次いで、Darwin(1872)による恐怖の記述が引用されている。その記述の中では、恐怖に関連した、目と口が大きく開かれ、眉が上がり上がるといった表情の変化、立ちすくんだり、しゃがみ込むといった骨格筋活動を伴う姿勢の変化、さらには、心拍の増加や呼吸のリズムが早くなることに加えて、皮膚の発汗のような自律神経系の変化が記述されている。

最後に、Mantegazza (1885)による憎悪の感情表出の描写が引用されている。ここでは、頭や胴体を後退させるような姿勢の変化や、顔をしかめたり、目を大きく見開いたり、歯をむき出したりといった表情の変化、こぶしを握ったり腕を振り回したり、足を踏み鳴らしたりする腕や脚の動作などが記載されている。

これらの感情表出に関する詳細な描写をJamesが引用した理由はどこにあったのだろうか。筆者の考えでは、これらの描写は、その後続く、心理学における感情研究の問題点に関する議論と深く関わっていたのではないかと思われる。

3.3 感情が生起する一般的なメカニズムを明らかにすることの重要性に関する指摘(因果関係を探求することと“金の卵を産むガチョウ”の関係)

感情表出に関連した詳細な描写を引用した後、Jamesは、これらの身体的な変化を詳細に調べることの意義に関して、とても否定的な見解を、繰り返し示している。“We should, moreover, find that our descriptions

had no absolute truth” (p. 447-448; 筆者訳: さらに言えば、このような[観察に基づく]記述の中には、絶対的な真実と呼べるようなものをまったく見いだせないことに思い至るべきだ)、ならびに“The result of all this flux is that the merely descriptive literature of the emotions is one of the most tedious parts of psychology.” (p. 448; 筆者訳: こうしたことを繰り返していた結果として、感情を記述するだけの著作物になってしまい、心理学の中でもっとも面白みのない領域の一つになってしまっている)などと述べて、個人差を観察して記述するという研究の取組みについて重要視しない立場を表明したのである。

それでは、感情表出の内容を詳細に調べることに対して、さほど重要な意味を見出せないと考えたJamesにとって、感情の心理学的な研究では、いったいどのような研究課題を設定して考究すべきであると考えたのだろうか。その答えが、これに続く段落に記述されている。Jamesは、“The trouble with the emotions in psychology is that they are regarded too much as absolutely individual things. So long as they are set down as so many eternal and sacred psychic entities, like the old immutable species in natural history, so long all that *can* be done with them is reverently to catalogue their separate characters, points, and effects.” (p. 449; 筆者訳: 心理学においては感情に関する考え方に問題が生じており、その問題とは、感情が、実際のあり方以上に、個別の特徴を持つものであると考えられていることである。自然史の中にありながら、少しも変わることなく存在し続けている動物種でもあるかのように、感情を、永遠かつ不可侵の霊的存在とみなしている限り、感情に対する研究の取組みは、それぞれの感情の個別の性質、特徴、ならびにその影響について、あたかも尊いものでもあるかのように、あるがままに列挙して分類していく作業だけにとどまってしまふ)などと述べて、感情表出に関する個人の特徴を記述する研究について否定的な見解を示した上で、次のように述べている。“But if we regard them as products of more general causes (as ‘species’ are now regarded as products of heredity and variation), the mere distinguishing and cataloguing becomes of subsidiary importance. Having the goose which lays the golden eggs, the description of each egg already laid is a minor matter.” (p. 449; 筆者訳: だが、もし感情について、一般的な因果関係から生み出されるものであると考えたとき(「生物種」が今

や遺伝と変異の結果生まれたと考えられているように)、[それぞれの感情の]相違点を見つけたり、特徴を探したりしているだけでは、その研究にさしたる重要性を見出すことはできなくなる。金の卵を産むガチョウがいるなら、産んだ卵の特徴を一つずつ記述したところで、あまり重要な問題にはならない。)つまり、Jamesは、感情反応の特徴を記述することよりもむしろ、感情に関する因果関係、すなわち、感情を生起させる一般的なメカニズムを明らかにできるような研究を遂行すべきであると述べているのであろう。そして、これに続けて、“Now the general causes of the emotions are indubitably physiological.” (p. 449; 筆者訳：感情が生起する一般的原因となるのは、生理的な活動であると考えて間違いない)と述べた上で、Langeが1885年に発表した学説と、James自身が1884年にMind誌に発表した学説を紹介している。

さらに、これと同じ段落の終盤では、感情を二種類に分類して、それぞれの感情の名称と内容とが説明される。第一の感情が、粗大感情 (coarser emotions) であり、悲しみ、恐れ、怒り、愛などのように、強い身体的な反応を経験するものである。他方、第二の感情は、繊細感情 (subtler emotions) であり、身体反応がさほど顕著ではない感情を含んでいる。

これに類似した感情の区別については、Mind誌の論文の中でも明確に述べられていた。つまり、感情を2つのグループに分類すること自体は、The Principlesの第25章において示された新たな着想というわけではなかった。他方で、Jamesが考える感情成立のメカニズムを説明する上で、身体反応がきわめて重要な意味を持っていたために、この第25章においては、それぞれの感情のグループに対して、身体反応の強さに基づき、粗大と繊細という対照的な名称をつけ、そのように名称をつけることによって、このような身体反応の特徴によって区分された、それぞれの感情の具体的な内容について、いっそう理解しやすいものとするを意図したのではないと思われる。

なお、この第25章の後続部分の中では、粗大感情が生起するメカニズムについて先に議論し、さらに後の部分で繊細感情を扱っている。一見したところ、このような章全体の構成は、Mind誌の論文と大いに類似しているとの印象を受ける一方で、章の構成要素間の関係性や議論の展開を詳細に確認していくと、繊細感情の扱いが、Mind誌の論文におけるものとは大きく異なっていることが明らかになる³⁾。

これに続く部分では、最初に、上述の粗大感情に関連して、主観的体験に先行して身体的な反応が表れ、身体的反応によって感情の主観的体験が生じるという学説が説明される。ここで説明される内容の前半は、James自身が1884年の論文で発表した内容をほぼ踏襲した内容となっている。ここでの議論を要約すると、感情心理学においては、感情を生起させる生理的メカニズムを明らかにすべきであるとのJamesの考え方が明確に示されている一方で、先に引用されたLange、Darwin、およびMantegazzaらの感情表出の描写に関する研究の意義については否定的な意見が示されており、ここで、これらの感情表出の研究を引き合いに出しているのはむしろ、James自身の感情学説の重要性を示すための比較対象として、利用されているのではないかという印象を受ける。これらの粗大感情に関する議論の後半部分 (Table 1の4Eおよび4F) は、The Principlesで新たに追加された部分であり、次の2つの節では、この後半部分における議論を取り上げて検討する。

3.4 この学説は唯物論的一元論ではない

上述したように、「金の卵を産むガチョウ」に例えながら、感情を生起させるメカニズムを研究することの重要性を指摘した後、James自身による、いわゆる「感情の末梢起源説」に関する説明が続く。この内容は、James (1884) とほぼ同じ内容である。

それに続いて、“Let not this view be called materialistic.” (p. 453; 筆者訳：この考え方が唯物論的であるなどとは言わないでいただきたい) と述べて、この学説が唯物論、ないし物質主義的な考え方とは異なることを主張している。この部分は、The Principlesで新たに追加されている。比較的短い段落であり、これは筆者の憶測にすぎないものの、あるいは、1884年のMind誌の論文を読んだ研究者から、このように指摘され、それに対する回答なのかもしれない。Jamesの学説では、身体反応の知覚が感情体験の成立に重要な役割を果たすことを主張しているために、もし一部の読者が、この学説における身体反応の役割の重要性にばかり注目してしまった場合には、この学説が、唯物論的な考え方であるかのように思われたのかもしれない。Jamesとしては、彼が関心を持って議論しようとしていたのは、主として、感情の主観的体験の側面であって、身体反応そのものに主たる関心があったわけではないと主張したかったのだろう。

Jamesが自らの学説を「唯物論ではない」と主張している点については、彼の著作を読むかぎり、きわめて妥当であるように思われる。拙論(2021b)の中でも述べたように、1884年のMind誌の論文の中でJamesがもっとも注目していたのは、実際のところ、感情現象における身体反応そのものの役割ではなく、身体反応の知覚からいかにして感情の体験が作り出されるかという脳内メカニズムであったようだ。また、Jamesは、本論の3.9節でも述べるように、The Principlesの第25章においては、脳内メカニズムだけではなく、感情の個人差として、感情の主観的体験の内容に着目し、感情体験の想起の鮮明度などを取り上げて議論している。これらの説明に関して、筆者は、唯物論的な考え方を読み取ることができず、Jamesの主張は妥当であると思われる。

3.5 感情をめぐる2種類の問題：感情表出の分類の問題と感情が生起するメカニズムの問題

彼の考え方が物質主義的ではないという主張に続き、本論の前節で述べた感情研究のあり方についての議論、すなわち、感情の分類や記述の研究と、感情が生起するメカニズムとの比較についての議論が、あらためて述べられている。その議論の中では、前節での議論と同様に、後者、すなわち、感情が生起するメカニズムを調べる研究が重要であることが結論づけられるとともに、Lange(1885/1922)の記述を引用しながら、感情が生起するメカニズムとして、反射の作用が重要であることが説明されている。“If such a theory is true, then each emotion is the resultant of a sum of elements, and each element is caused by a physiological process of a sort already well known. The elements are all organic changes, and each of them is the reflex effect of the exciting object” (p. 453; 筆者訳：もしこの理論が正しいならば、個々の感情は、要素の総和によって決まるとともに、個々の要素は、すでによく知られている生理学的な過程によって生じることとなる。その要素はすべて身体的な変化であって、個々の身体的変化は、刺激からの反射作用によって生じる)と述べて、感情が生起するメカニズムを、反射という生理学的概念によって説明しようと試みている。

3.6 James学説を実験的に検証することの困難さ

反射に関連した議論などに続いて、Jamesの理論を実験的に検証する方法と、それを実行することが困難であることについて述べられている。Jamesによれば、

彼の理論が間違っていることを証明するためには、一つしか方法がないという。その方法に関連して、“The only way coercively to disprove it, however, would be to take some emotion, and then exhibit qualities of feeling in it which should be demonstrably additional to all those which could possibly be derived from the organs affected at the time” (p. 455; 筆者訳：しかしながら、この仮説について、多少強引であっても、誤りであると証明したいのであれば、いずれかの感情を取り上げて、その感情における主観的体験の内容の中に、感情によって生じた身体変化に由来していたと思われる要素以外に、何か別な感情体験の性質が付与されることを示すしかないだろう)と述べている。

他方、Jamesの仮説が正しいことを証明する方法についても述べている。仮に、内外からの感覚が完全に失われつつも、筋肉に麻痺のない(p. 455, “absolutely anaesthetic inside and out, but not paralytic”)人を研究の対象とすれば、感情を喚起する対象物を示し、感情の身体表出が通常通り生じる。そのときに、主観的な感情の体験が、まったく生じないだろうとJamesは予想している。つまり、身体反応を知覚できなければ、仮に身体反応が生じていても、感情の主観的体験は生じないだろうということである。

だが、残念ながら、これに該当する対象者は、ほとんど存在しないようであり、Jamesが知る範囲で、その当時までに、3件報告されているものの、これらのいずれの症例報告に関しても、彼の理論を証明できるような検討は行われていないらしい。

3.7 James学説への反論についての検討

Jamesが提唱する学説について科学的に検証する方法などについて述べられた後、彼の感情学説に対する反論に対する、彼自身からの回答を述べている。第一に、知覚によって、感情の体験が生じる前に、身体反応が生じるという証拠があるのかという反論(p. 456-457)について述べられている。第二には、このJamesの説が仮に正しければ、特定の感情を装って、身体的な反応を意図的に表出したときには、感情がつねに生じるはずであるけれども、役者が演技の中で感情を表現していても、内面的には感情が生じていないことを例に挙げて、このJamesの仮説は正しくないとする反対意見(p. 462)を取り上げている。また、第三には、感情は表出されることによって、感情の強さが増強するよりはむしろ、終結することへと向かうという指摘(p. 466)に

ついて議論している。

いずれの反対意見に対しても、これらに反論する際には、Jamesの1884年の論文の記述を利用するだけでなく、他の文献から関連した記述を引用しながら、1884年の論文以上に説得力を高めようと試みたようである。第一の反対意見に対する反論として、Jamesの1884年の論文の内容と合わせて、大きい音を聞いたときに、危険に関する観念や連想に関係なく、恐怖の身体反応が表れるというLange(1885/1922)の記述を引用しながら議論を展開している。また、第二の反対意見に対する反論として、Edmund Burkeの著作“The Sublime and Beautiful”の中にある人相学者Campanellaに関する記述や、Archer(1888)が行った俳優たちへのアンケート調査の結果などを引用しているし、第三の意見への反論としては、Alexander Bainの著書“The Emotions and the Will”の中にある感情の制御に関する記述を引用して、彼自身の主張を補強している。

これらの議論を読むかぎりは、Jamesの主張を支持する根拠となるような記述を追加している一方で、彼の感情学説の中に、それまでなかったような新たな視点が追加されたということはないように思われる。

3.8 繊細感情について

すでに述べたように、The Principlesの第25章において、Jamesは、感情を2種類に分類した。この分類は、顕著な身体反応を伴うかどうかに基づいたものであり、強い身体反応を伴う感情は、粗大感情と呼ばれた一方で、さほど顕著な身体反応を伴わない感情は、繊細感情と呼ばれた。

これに対して、1884年のMind誌に掲載された論文の中でも、Jamesは、同様の感情の分類を行っていた。ただし、この論文の中では、この粗大感情および繊細感情という2種類の感情の名称を見出すことはできない。つまり、1884年の時点では、その感情分類の名称が異なっていたのである。粗大感情に関連しては、驚き、好奇心、歓喜、恐れ、怒りなどの感情の名称を挙げた後、“The bodily disturbances are said to be the “manifestation” of these several emotions, their “expression” or “natural language”; and these emotions themselves, being so strongly characterised both from within and without, may be called the *standard* emotions.”(James, 1884, p, 189; 筆者訳：身体的な変化は、これらの数種類の感情の「表現」であり、こうし

た感情の「表出」や「自然言語」とも呼ばれる。これらの感情の本質的な特徴は、身体の内双方における強い変化を伴うことであり、これらを一般的感情と呼ぶことができるだろう」と、Mind誌の論文では述べられており、The Principlesでは、顕著な身体変化を伴う感情の名称が、一般的感情から、粗大感情へと変わったことがわかる。

また、1884年の論文にて、繊細感情に近い内容を意味した感情の名称を探してみると、“cerebral forms of pleasure and displeasure” (p. 201; 大脳における快・不快の表現形式)、“pure cerebral emotion” (p. 201; 純粋に脳内で生じる感情)、“intellectual emotion” (p. 202; 知性的感情)といった表現を見出すことができる。つまり、感情の分類は、1884年の論文の中で、すでに行われていたものの、その感情分類の名称を、The Principlesにおいて新たに提案したということである。

他方、この2種類の感情の分類に関連したThe Principlesの第25章における変更点は、感情分類の名称だけではなくたことにも留意すべきだろう。つまり、繊細感情の生起のメカニズムについての考え方が、部分的に修正されていたことを指摘できる。

1884年のMind誌の論文において、Jamesは、“I should say first of all that the only emotions I propose expressly to consider here are those that have a distinct bodily expression” (James, 1884, p, 189; 筆者訳：筆者が最初に述べておきたいのは、本論の考察の中で扱う感情は、顕著な身体的表出を伴う感情のみである)と述べて、これらの2つの感情のうち、Jamesの感情学説で説明を試みるのは、一般的感情、ないしは粗大感情のみであることを主張していた。言い換えれば、繊細感情は、考慮に含めようとしてはいなかった。つまり、繊細感情は、当初は彼の感情学説における議論の対象外であったと考えられる。

ところが、The Principlesの第25章においては、粗大感情と繊細感情とがまったく同等の扱いというわけではないものの、この繊細感情も含めて、彼の感情学説の枠組みの中で説明をしようと試みているような印象を受ける。繊細感情について、粗大感情と同様のメカニズムで説明を行うために、繊細感情を2つの要素に分ける必要があることを指摘して、審美的な感情を例に挙げながら、次のように述べている。“the discrimination between the primary feeling of beauty, as a pure incoming sensible quality, and the secondary emotions which are grafted thereupon, is one that must

be made.” (James, 1890, p. 470; 筆者訳: 美についての一次的な感情は、刺激として受容された感覚的性質のみを有する一方、二次的な感情は、その後について生じるものであり、これらをきちんと区別しておくことが必要である。)

そして、この二次的な感情が生起するメカニズムについて、“These secondary emotions themselves are assuredly for the most part constituted of other incoming sensations aroused by the diffusive wave of reflex effects which the beautiful object sets up.” (James, 1890, p. 470; 筆者訳: これらの二次的な感情を構成している要素の大部分は、他のさまざまな感覚入力作用であると考えて間違いないだろうし、これらの作用は、美しい対象物によって生じた、広範囲に拡散する波のような反射的作用によって引き起こされているのである)と説明している。このことはつまり、繊細感情の構成要素である二次的な感情(secondary emotions)については、粗大感情と同様に、感覚刺激の入力に伴って生じた反射のメカニズムによって生起するとJamesが考えていたことを意味しており、その点に着目すれば、1884年の論文で提唱された粗大感情が生起する身体のメカニズムに関して、1890年のThe Principlesにおいては、繊細感情の一部のプロセス、すなわち二次的感情の生起にも同様に関連するものと考えられており、この感情生成のメカニズムの適用範囲が拡大されたとも考えることができるだろう。

このように、Jamesの感情学説における議論の対象が拡大されたことに関しては、本論の第2節で引用した、Dunlap(1922)の序文の中における指摘とも深く関わっていると思われる。当該部分をあらためて引用すると、“But there is a still more important reason, in that the *Mind* article gives a much more clear-cut presentation of the organic theory of the emotions than does the chapter from the *Principles*: and in the latter James concedes much more to the esthetic and spiritual emotion in the way of independence of somatic and visceral processes than he does in the former. Whatever may have caused James to soften his views on this point, his first formulation of the theory is in this respect the more important.” (Dunlap, 1922, pp. 5-6; 筆者訳: しかし、*Mind*誌に掲載された論文で述べられていた感情の身体論の内容が、The Principlesの該当する章よりも明瞭でわかりやすいものであったことについては、もっと重要な理由がある。前者[すなわち、*Mind*誌

に掲載された論文]に述べていた内容に比べると、後者[すなわち、The Principles]において、審美的ないし宗教的な要素の強い感情が、身体活動、ないし、内臓活動とは独立であることを、Jamesはより明確に述べている。Jamesの考え方の中で、この部分の議論が比較的穏健なものに変わってしまった理由が何であるにせよ、最初に論文として発表された彼の感情理論の内容は、この点を考える上で、いっそう重要になっている。)この中でDunlapが、「後者[すなわち、The Principles]において、審美的ないし宗教的な要素の強い感情が、身体活動、ないし、内臓活動とは独立である」と述べている点については、慎重に検討する必要があるだろう。つまり、Jamesは繊細感情が生起するプロセスを一次的感情(primary feeling)と二次的感情(secondary emotions)とに分けて考えていて、その中の一次的感情は感覚入力の内容だけで構成されていると考えていた一方で、二次的感情は、一次的感情に続く、反射のメカニズムに基づいて生じた、さまざまな身体反応の感覚によって構成されるとJamesは考えていたようである。このことを踏まえて考えれば、繊細感情における一次的感情のプロセスだけを取り上げたときには、確かに、Dunlapが指摘するように、身体活動とはかなり独立であると言える一方で、二次的感情は、むしろ、身体活動と密接に関連していると結論できるだろう。

そして、Dunlapの指摘によれば、繊細感情に関するJamesの議論が「比較的穏健なものに変わってしまった」とのことであるけれども、この点について、筆者の考えるところでは、The PrinciplesにおけるJamesの議論が穏健になったというよりは、繊細感情において、身体反応と独立した一次的感情と、身体反応の知覚と密接に関連した二次的感情という複数の生成プロセスを仮定したために、繊細感情の生成プロセスに関する説明が、複雑で、わかりにくいものになってしまったことによるのではないかとも思われる。仮に、1884年のMind誌の論文と同様に、繊細感情を議論の中心から外していれば、The Principlesにおける議論も、1884年の議論と同等、もしくは、より明快な説明ができていたのかもしれない。

3.9 感情の個人差(感情的性質と想像力の個人差)

感情に特異的に関与する中枢が脳に存在しないこと(Table 1の8)を主張した後、Jamesは、感情の個人差について議論しており、この部分は、The Principlesで新たに追加されている。末梢の身体反応を重視した

Jamesの感情学説なのだから、「感情の個人差」というタイトルを付されているのであれば、感情が喚起されたときの身体反応の個人差かと思えば、まったくそうではない⁴⁾。本論の3.4節でも述べたように、Jamesの感情学説は、決して唯物論的、もしくは物質主義的な一元論ではなく、ここで扱われる個人差は、主観的体験に関するものである。

最初に、Jamesは、感情の記憶をどれだけ鮮明に想起できるか(the revivability in memory of emotions)という問題を取り上げている。過去に経験した深い悲しみや強い喜びについて思い出そうとすると、その時までさかのぼって、具体的にどのような感情を体験していたのかを頭で考えて、観念として思い出そうとするのは容易ではない。その一方で、当時、悲しみや喜びの感情を生起させた対象やできごとを思い出しながら、今ここで、新たな感情を実際に経験することによって、当時の感情の体験をより鮮明に想起することができるようになる。

この議論を踏まえて、Jamesは、“*An emotional temperament on the one hand, and a lively imagination for objects and circumstances on the other, are thus the conditions, necessary and sufficient, for an abundant emotional life.*”(James, 1890, p. 475 ; 筆者訳：そのため、感情的に豊かな生活を送るための必要十分条件とは、感情的な気質とともに、過去に見聞した事物や、経験した状況を鮮明に想起できることである)と述べている。感情を引き起こす視覚的な心像が不鮮明であると、さほど強い感情が喚起されにくいということのようである。

さらに、Jamesは、感情の個人差についての議論の最後に、同様の対象を繰り返し経験することで、感情の強さが弱くなっていくという点を指摘している。つまり、刺激への順応の問題であり、この点について、Jamesは、“*They blunt themselves by repetition more rapidly than any other sort of feeling.*”(James, 1890, p. 475 ; 筆者訳：感情が繰り返されることで、他の感覚経験に比べて、感情の反応は急速に弱まっていく)と述べている。こうした順応の作用の背景には、刺激に対する順応の作用に加えて、「波状に広がる反射の作用」(p. 475 ; the ‘diffusive wave’ of reflex effects)が関与しているとJamesは説明している。

3.10 さまざまな感情が生じる背景について

この部分では、感情に伴って、なぜ特定の身体的

反応が生じるのかについて議論している。例えば、恐怖には、さまざまな身体的な反応が伴うものの、そうした反応はなぜ生じるのかという問題である。Jamesによれば、感情に伴う一部の身体反応については、どのような理由によって生じるかがわかっている。また、どのような理由で生じているのかが明確になってはいないものの、その理由をおおよそ推測できる身体反応もある。合理的理由があって、ある種の感情に含まれると考えられている身体反応としては、怒りや恐れに感情に伴って生じる呼吸のリズムの変化があり、こうした反応については、適応の上で一定の機能を果たしていたり、生理的に必要であったりすると考えられるような反応が、その強度を弱めつつ、特定の感情とともに生じることがあると述べられている。このことに関連して、感情を喚起させた対象に対処しようと強い働きかけをしたときに有用であった反応に関して、その強度が減弱されて再生されるという規則性、すなわち、「感情喚起対象への対処に有用であった反応が減弱して再現される法則」(p. 479, the principle of revival in weakened form of reactions useful in more violent dealings with the object inspiring the emotion)、もしくは「有用反応に関する再生減弱法の法則」(p. 481, the principle of revival of useful action in weaker form)といった法則性について指摘している。

また、WundtとPideritによる、道徳的問題に対する身体反応と、味覚に関連した身体動作との共通性に関する指摘を引用し、嫌悪に関連した感情の反応としては、口唇と鼻を歪める動作が見られ、満足に関連した感情の中では、何かを味わうかのような口唇の動作を示したりすることを例として挙げながら、嫌悪と苦み、満足と甘みという類似性のある経験の間では、反応の類似性があることを指摘し、この規則性について、Jamesは、「共通性のある感情喚起刺激に対する類似反応の法則」(p. 481, the principle of reacting similarly to analogous-feeling stimuli)と呼んでいる。

他方、こうした法則、ないし規則性を考慮に入れても、なぜ特定の感情に伴って生起するのかという理由を説明できない反応が多くあるという。つまり、なぜそのような反応が生じるのかを合理的に説明できず、適応上まったく役に立たないどころか、不適応を生じさせたり、病的であったりする反応もある。Jamesは、恐怖の感情における震えなどを例に挙げている一方で、血圧や心拍といった循環器系の反応でさえも合目的ではないものと位置づけている。この点について、

Spencerによる指摘として、イヌやネコの尾、ウマの耳、ヒトの表情や手の指といった、微細な筋肉に速やかに興奮が伝達されることにより、感情に伴って最初に反応が生じやすいことを述べた上で、Jamesは、以下のように述べている。“This principle (if it be one) would apply still more easily to the muscles of the smaller arteries (though not exactly to the heart) ; whilst the great variability of the circulatory symptoms would also suggest that they are determined by causes into which utility does not enter. The quickening of the heart lends itself, it is true, rather easily to explanation by inherited habit, organic memory of more violent excitement” (p. 483 ; 筆者による和訳: 仮に、これが法則性と呼べるものであるならば、心臓には適用できないにしても、微細な血管を構成する筋肉については、容易に適用できるだろう。他方、循環器の変化には変動性が大きく一貫性がないために、これらの変化を生み出す原因は、実際の効用を伴わないような、合理的ではないものであるだろう。間違いなく言えることとして、心臓の拍動が速くなることは、遺伝的に受け継いだ傾向であり、身体の中に記憶として刻まれているような強い興奮状態として明瞭に説明することができる。)

ここで述べられている循環器系反応に関する議論に関しては、循環器系反応の内容を決定づける原因が、合目的的なものではないことを指摘することにとどまらず、Jamesの感情学説における主要な論点の一つを端的に説明しているようにも思われる。つまり、拙論(佐藤, 2022)においても指摘した通り、Jamesの感情学説においては、身体活動が感情の主観的体験に先行し、感情体験を成立させる原因となることが想定されている一方で、感情体験を成立させる上での重要性に関して、さまざまな身体活動の中でも重要性に違いがあるとJamesは考えていたようである。

そして、この筆者の推測とも対応して、Jamesは、本章の前半において、“My impression is that Dr. Lange simplifies and universalizes the phenomena a little too much in this description, and in particular that he very likely overdoes the anaemia-business.” (p. 446 ; 筆者による和訳: 私の印象では、Lange博士は、この現象について、いささか単純化、ならびに一般化しすぎているきらいがあるようだし、特に、血流低下に関連した問題に対しては、その傾向が顕著であるように思われる)と述べている。この文中の“the phenomena”(この現象)とはおそらく、悲しみの感情において生じる心身のさま

ざまな変化、およびこれらの複数の変化の間関係性のことを言っていると思われる。これに関連して、筆者は、かつて拙論(佐藤, 2022)において、Jamesは、他の文献(James, 1894)においても、血流変化を重視するLangeの指摘に疑問を呈していたことを指摘した。本節で取り上げた、感情が生起するメカニズムについての議論の中では、Langeの名前が記されていないものの、JamesがLangeの指摘を疑問視した理由の一つが、ここで述べられているような循環器機能の変動性や合目的でないことに関連していたのかもしれない。つまり、The Principlesでの記述を見るかぎり、循環器系の反応は、感情体験を成立させる主要な要因とはなりえないとJamesは考えていたようであり、その理由として、循環器系の反応の一貫性が小さく、感情を成立させる決定因としてみなすことが難しいと考えていたのではなかろうか。

3.11 結語(感情の分類について)

Jamesは、感情を扱った第25章の最後に、感情には、さまざまな分類が可能であることについて述べている(p. 485)。目的に応じて、さまざまな感情の分類が可能であり、1) 悲しみか喜びか、2) 興奮性か鎮静性か、3) 生得的か、あるいは、後天的に獲得されたか、4) 動いている対象、もしくは、動かない対象のいずれから喚起されたか、5) 形相と質料のいずれの側面に関連するのか、6) 感覚と観念のいずれに関連するのか、7) 対象に対する直接的なものか、または思慮の結果生じたものか、8) 利己的か、または、非利己的か、9) 過去、未来、または、直前に起こった事柄のいずれに関連しているか、10) 体内の活動から生じたものか、あるいは、周囲の環境から生じたものかという10種類の分類方法を紹介している。これらの感情の分類の説明に続き、章の最後には、参考図書を紹介している。

3.12 後章との接続(感情と意志との関連)

第25章に次ぐ第26章は、意志(Will)と題されている。ここでは、第25章から、第26章にかけての接続部分、すなわち、第25章の章末と、第26章の冒頭において、感情と意志との関連について、どのような議論がなされているかを確認しておきたい。

最初に、第25章の中では、その章の終わりに近い部分も含めて、感情と意志の関係に関する議論はほとんど述べられていない。そして、章が改まった後、

第26章の最初の2つの段落にも、感情に関連した記述は見当たらない。これらの段落の内容について、具体的な記述を見てみると、第26章の冒頭の段落では、欲求 (desire)、願望 (wish)、および意志 (will) のそれぞれの意味と関係性が、以下のように説明されている。“Desire, wish, will, are states of mind which everyone knows, and which no definition can make plainer. We desire to feel, to have, to do, all sorts of things which at the moment are not felt, had, or done. If with the desire there goes a sense that attainment is not possible, we simply *wish*; but if we believe that the end is in our power, we *will* that the desired feeling, having, or doing shall be real; and real it presently becomes, either immediately upon the willing or after certain preliminaries have been fulfilled.” (p. 486 ; 筆者訳 : 欲望、願望、意志は、われわれの誰もが経験して知っている心的状態であり、これ以上平易な言葉で定義することができない。われわれが、何かを感じたい、手に入れたい、行いたいという欲望 (desire) を感じるとき、これらのものを求めている時点では、感じられず、手に入れられず、行えないことばかりである。求めながらも、実現できないだろうと思ったならば、われわれは単に願望 (wish) をもつことしかできない。だが、目標を実現できそうだと思えば、欲望に従って感じたり、手に入れたり、行ったりすることを実現しようという意志 (will) を持つのであるし、実行の意志を持った直後、あるいは、一定の準備が行われた後、そのことが現実のものとなる。)

次いで、第26章の第2段落では、以下のように述べており、この中では、意志と身体運動との関係性を述べた後に、随意運動をめぐる、体系的ないし論理的に整理しづらい点があることを指摘している。“The only ends which follow *immediately* upon our willing seem to be movements of our own bodies. Whatever *feelings* and *havings* we may will to get, come in as results of preliminary movements which we make for the purpose. This fact is too familiar to need illustration; so that we may start with the proposition that the only *direct* outward effects of our will are bodily movements. The mechanism of production of these voluntary movements is what befalls us to study now. The subject involves a good many separate points which it is difficult to arrange in any continuous logical order. I will treat of them successively in the mere order of

convenience; trusting that at the end the reader will gain a clear and connected view.” (p. 486 ; 筆者訳 : 何かをしようという意志が生じた直後に、その唯一の目的となるのは、われわれ自身の身体運動であると思われる。われわれの意志として、何かを感じたり、持ったりしようとするときは、どのような場合であれ、その目的を実現すべく行った運動の結果から生じている。このことは周知の事実であって、詳細な説明は必要ない。そのため、われわれの意志によって直接的に起こる結果は、身体運動であるという前提で話を始めたい。随意運動を引き起こすメカニズムこそが、今まさに私たちが議論しようとしていることである。この問題には、個別に議論すべき点が多く含まれており、これらの点については、論理的に順序立てて説明することが難しい。[著者の側で]説明しやすい順序で議論を進めることとすけれども、この章の末尾まで読んでいただくことで、より明快で論旨が通った考え方であることを読者にご理解いただけることと思う。)この段落の末尾の文について、別な言い方をすれば、最後まで読んでもらわないと、正確に理解することはできないだろうという注意喚起でもあるのかもしれない⁵⁾。

これに続き、第2段落と第3段落の間には、空白行が一つあることから、この空白行に先立つ、冒頭の2つの段落が、第26章の序文に相当するものと思われる。この2つの段落の内容に関しては、上述のように、感情に関する内容をほとんど含んでいなかった。

他方、これに続く第3段落については、次のような記述で始まっている。“The movements we have studied hitherto have been automatic and reflex, and (on the first occasion of their performance, at any rate) unforeseen by the agent. The movements to the study of which we now address ourselves, being desired and intended beforehand, are of course done with full prevision of what they are to be. It follows from this that *voluntary movements must be secondary, not primary functions of our organism*. This is the first point to understand in the psychology of Volition. Reflex, instinctive, and emotional movements are all primary performances. The nerve-centres are so organized that certain stimuli pull the trigger of certain explosive parts; and a creature going through one of these explosions for the first time undergoes an entirely novel experience.” (p. 486-487 ; 筆者訳 : われわれがこれまで扱ってきた運動については、自動的で、なおかつ反射的であって、(その運動が

初めて行われるときはいつでも)運動する主体の側では、どのような結果になるのかを予想できない。他方、ここで今まさに議論の対象にしている運動に関しては、先行する欲求や意図によって生じるものであって、当然ながら、結果がどうなるのかを十分に予想できる。このことから言えるのは、随意的な運動とは、生体にとって二次的な機能であって、一次的な機能ではないということである。この点こそが、意志の機能を調べる心理学において、最初に理解すべきことである。反射的、本能的、および感情的な運動はいずれも、一次的な運動の機能である。神経の中樞の構造に基づいて、ある種の刺激が、何らかの運動反応を生じさせる。生体がこの種の運動反応を初めて経験したときに、まったく新しい体験が生じる。)この文章の中では、Jamesが、反射や本能に伴う運動と合わせて、感情表出に関連した運動に関しても、一次的な運動機能に含めていたことが明瞭に示されており、Jamesによる一次的な運動機能の定義に従えば、その種の感情表出を最初に経験するときには、表出する主体である当事者本人でさえ、その感情表出がどのような結果に至るのかを予想することはできないと考えていたようである。

この第3段落には、上述の文章に続いて、次のような記述がある。“The other day I was standing at a railroad station with a little child, when an express-train went thundering by. The child, who was near the edge of the platform, started, winked, had his breathing convulsed, turned pale, burst out crying, and ran frantically towards me and hid his face. I have no doubt that this youngster was almost as much astonished by his own behavior as he was by the train, and more than I was, who stood by.”(p. 487; 筆者訳: 先日、鉄道の駅に小さな子ども⁶⁾と一緒に立っていたところ、急行列車が大きな音を立てながら、われわれの近くを通り過ぎて行った。子どもは、ホームの端に近いところにいるのだが、急に驚いて、まばたきをし、呼吸は乱れ、顔色が青白くなったと思うと、急に大声で泣きだして、私のほうに慌てて駆け寄り、自分の顔を手で覆ってしまった。間違いなく言えることは、この子どもにとっては、列車が近くを通っていたときとほとんど同じくらいに、自分自身がとった行動に対しても驚いており、さらには、子どもの近くにいた私などよりもむしろ、子ども自身のほうが強い驚きを経験したに違いないという点である。)この子どもの行動や身体的変化の描写に関しては、これはまさに、驚きという感情の表出に関する記述

にほかならない。

このような子どもの感情表現の描写に続いて、Jamesは次のように述べている。“Of course if such a reaction has many times occurred we learn what to expect of ourselves, and can then foresee our conduct, even though it remain as involuntary and uncontrollable as it was before. But if, in voluntary action properly so-called, the act must be foreseen, it follows that no creature not endowed with divinator power can perform an act voluntarily for the first time. Well, we are no more endowed with prophetic vision of what movements lie in our power, than we are endowed with prophetic vision of what sensations we are capable of receiving. As we must wait for the sensations to be given us, so we must wait for the movements to be performed involuntarily,* before we can frame ideas of what either of these things are. We learn all our possibilities by the way of experience. When a particular movement, having once occurred in a random, reflex, or involuntary way, has left an image of itself in the memory, then the movement can be desired again, proposed as an end, and deliberately willed. But it is impossible to see how it could be willed before.”(p. 487; 筆者訳: 言うまでもなく、こうした反応が何度も生じた場合には、自分自身に何が起こるのかを体験的に学ぶことができ、その結果、自分の行為を事前に予想できるようになり、このことは、以前と同様に、その反応が不随意であって意識的に制御できないままである場合にも当てはまる。だが、随意運動と呼ぶべき行為において、その行為を事前に予測できないと考える場合、予知能力でも持っていない限り、何らかの行為を最初に行う時点では、これを随意的に実行することができないと言わざるを得ない。そのために、どのような運動を自らが行えるかを事前に予想することはできず、このことは、どのような感覚刺激を受容できるかを予想できないことと同様である。感覚にせよ、運動にせよ、それぞれの構成要素がどのような内容かという観念が形成されることに先立って、感覚であれば、感覚が入力されるのを待つ必要があるのと同様に、運動であれば、不随意に生じる運動を待たなければならない。我々は、経験を通じて、自らの中で、どのようなことが起こりうるかを学ぶ。何らかの運動が、あるとき偶然に、反射的、もしくは、不随意に生じたとき、その心象が記憶の中に保持されていれば、その運動を、もう一度行おうとする欲求が生じ

る可能性があり、これはまさに、一定の目的を有した運動であって、自らの意志で欲したのである。しかし、この運動が生じる前に、どのような意志によって、その運動を行うに至ったかという理由については、もはや知ることはできない。)この文章の中で、Jamesは、随意的な運動の制御に先行して、当初は不随意であった、さまざまな運動を繰り返し経験し、体験的に学習することが必要であると主張している。

この段落において、子どもの感情の描写に先立ち、Jamesは、反射や本能、感情の反応が一次的な運動反応であって、随意的な運動は二次的な反応であると述べていたことを考慮に入れれば、第26章の冒頭における3つの段落の内容は、これに先立つ第24章の本能や、第25章の感情の議論を踏まえたものになっており、これらの章を配置した順番についても、第24章および第25章の議論を踏まえて、第26章において、本能、感情、および意志の間の関連性をJamesが指摘しようとしていたことによるのではないだろうか。このことに関連して、随意的な運動がなぜ「二次的」なのかと言えば、当初、一次的であった反応を何度か経験する中で、記憶に保持されて、随意に実行できるようになるという説明が、この段落の中で行われている。この一次的な運動機能に感情が含まれることを考慮すれば、The Principlesにおける感情の議論は、第25章において完結するものではなく、これに続く第26章において、意志に基づく随意運動との関係性について、一次的および二次的という運動の分類に基づきながら、感情と意志との関係性についての説明が行われているとも考えられる。この点をめぐる議論については、Jamesの従来の感情学説の内容に対する修正があったわけではないものの、随意運動や意志との関連を踏まえながら、彼自身の感情学説の内容を拡張ないし発展させる内容になっていると考えて良いのではなかろうか。

4. 全体の総括

本論における、ここまでの議論の中では、1884年に発行されたMind誌の論文から、1890年に刊行されたThe Principlesにかけて、Jamesの感情学説の中で追加、ないし変更された内容について、個々の変更部分に着目しながら、詳細な検討を行ってきた。こうした個別の変更点を踏まえながら、The Principlesの第25章全体の議論を通じて、Jamesの学説に対して、新たにどのような変更が行われたのかを、本論の最後に整理しておきたい。以下では、主要な変更点として4つの点

を指摘する。

第一に、Jamesは、The Principlesの第25章において、感情を2種類に分類した。この分類は、顕著な身体反応を伴うかどうかに基づいたものであり、強い身体反応を伴う感情は、粗大感情(coarser emotions)と呼ばれた一方で、さほど顕著な身体反応を伴わない感情は、繊細感情(subtler emotions)と呼ばれた。この感情の分類は、Jamesの感情理論を理解する上で、非常に重要なポイントとなる。

第二に、少なくとも、1884年にMind誌に掲載された論文において、末梢機能を重視したJamesの感情学説の中では、前者、すなわち粗大感情のみを議論の対象にしていた。これに対して、1890年のThe Principlesの第25章においては、繊細感情の中の二次的感情を含めながら、身体反応との関係性に基づいて感情が生起するメカニズムを説明しようとしていた。このことは、The Principlesにおける、感情体験が成立するメカニズムに関する議論についての重要な特徴であると考えられる。つまり、1884年のMind誌の論文におけるJamesの感情学説で中核となっていた、粗大感情が生起するメカニズムについての議論は、1890年のThe Principlesにおける感情学説においても、ほぼそのままの内容であった一方で、1884年の論文の内容に比べて、The Principlesにおいては、繊細感情が生起するメカニズムの議論に関して、かなり重要な追加や変更が行われていた。

第三に、Jamesは、彼が想定した感情成立のメカニズムについて議論する際には、血圧や心拍といった循環器系の機能をあまり重要視していなかったようである。これに関連して、循環器機能の変化を重視するLangeの考え方に対して、拙論(佐藤, 2022)でも指摘したように、Jamesは、The Principlesの中で批判的な意見を表明している。このJamesによるLange批判の背景としては、Jamesが循環器機能の影響を重要視していなかったことが関係していたと思われる。

最後に、第四の変更点として、このThe Principlesの中では、直前および直後の章で述べられている本能や意志との関係性についても議論がなされていた。その議論の中では、これらの感情以外の心理的な機能とも関連づけられながら、彼の感情学説が、反射、本能、感情、および意志を含む、より包括的な心理学的理論の一要素となっていたと考えることができる。

このことに関連して、The Principlesでは、粗大感情だけでなく、繊細感情に関しても身体反応との関係性

の中で説明を試みた点や、本能や意志など他の心理的機能との関連を議論した点など、彼の感情学説が、より包括的で、スケールの大きな心理学的理論へと発展した印象を受ける。しかしながら、その感情学説のすそ野を広げてしまったこと、もしくは、一次的感情や二次的感情といった抽象的概念を導入したために、説明内容が抽象的になってしまったことによって、Dunlap (1922)も指摘しているように、その議論の明快さが失われ、説得力を失ってしまった部分もあったのかもしれない。

本論では、Mind誌に掲載された論文 (James, 1884) と比べてときに、The Principles (James, 1890) の第25章において、Jamesの感情学説がどのように変わったのかを検討し、その結果として、上述のような主要な変更点があったことを指摘した。Jamesの感情学説に関して、1884年に発表された内容から、1890年の内容と比べてときに、顕著な変化があることが確認できたことから、同じJamesが提唱した感情学説と言っても、その発表時期によって、学説の内容が、ある程度まで変わりを想定すべきであり、そのため、学説の内容の経時的な変化を明らかにしていくことは、Jamesの感情学説を正確に理解する上で不可欠であり、きわめて重要な意味があると考えられる。

今後の課題としては、1892年以後の文献と、それ以前の文献とを比較しながら、Jamesの感情学説に変化があったかどうか、仮に変更があったとすれば、どの部分がどのように変わったのかを検討していきたい。それと合わせて、The Principlesの中の、第25章以外の章、あるいはその他のJamesの文献に見られた感情に関する議論の内容を確認し、感情と、それ以外の心理的機能がどのように関連づけられ、より広範な心理現象の説明の中で、Jamesの感情学説の内容がどのように展開されていたかという点についても、検討していきたいと考えている。

注

1) 感情の末梢説とは、感情、もしくは感情体験が、重視する身体部位や、身体から受ける影響の大きさや内容についての考え方の違いはあるにせよ、末梢の身体的変化に基づいて成立するという感情研究のアプローチである。Cornelius (1996) は、感情研究のアプローチを特徴づける視点を大きく4つに区別した際に、この感情の末梢説をその中の一つに位置づけるとともに、William James (1884,

1890)の考え方を受け継いだ感情へのアプローチであるとして、ジェームズ流の考え方 (the Jamesian perspective) という名称で呼んでいる。つまり、この末梢活動を重視した感情研究においては、Jamesの考え方が歴史的な源流であるとみなされているのである。

- 2) なお、拙論 (佐藤, 2022) において取り上げた、Langeの学説 (1885) に関連して、このThe Principlesの感情の章で追加もしくは変更された部分については、上述の拙論との重複を避けるために、簡略にのみ説明することとし、他の項目を重点的に議論していきたい。そのため、Langeの学説に関連した変更部分についての詳細については、上記の拙論を参照されたい。
- 3) この点については、後の繊細感情に関する項目の中で、詳細に議論を行う。
- 4) 上述したように、Jamesは、彼自身の感情学説が唯物論的な考え方ではないと述べていたし、後述するように、感情の個人差の問題として、主観的な体験の違いに着目している。実際に、1884年のMind誌の論文や、The Principlesの第25章を読んでいると、彼の感情学説では、身体的変化の現象と関連づけながらも、感情の主観的体験の側面に焦点を当てている。別な言い方をすれば、Jamesにとって感情とは、つまり、感情の主観的体験を意味しているのだと理解できる。
- 5) 本論では、Jamesの感情学説に関して議論を行うことが目的であるので、意志に関する第26章全体の内容を紹介することはせず、感情に関連した記述を含む第26章の冒頭部分の内容を中心に議論を進める。
- 6) この文章中に記載されている子どもが、具体的に誰なのかは、本文中に記載されていない。だが、近くを通り過ぎる急行列車を見た後、おびえながらJamesのほうに駆け寄ってきたということを考えると、James自身の子どもの中の一人であったのかもしれない。この出来事が起こったのがいつだったのかが記載されていないものの、The Principlesの初版が刊行された1890年以前の時点で、鉄道の駅に一人で立って、走ったりできた男児と考えれば、Jamesの5人の子どものうち、1884年出生後、翌年に亡くなった第三子Herman、1887年出生の女兒である第四子Margaret、ならびに1890年出生の第五子Alexanderを除き、1879年5月出生のHenry、または

1882年6月出生のWilliamのいずれかであろうと推測される[Jamesの子どもの出生の年月については、Richardson(2006)に基づく]。

引用文献

- Bechara, A., & Damasio, A. R. (2005). The somatic marker hypothesis: A neural theory of economic decision. *Games and economic behavior*, 52(2), 336-372. doi:<https://doi.org/10.1016/j.geb.2004.06.010>
- Cornelius, R. R. (1996). *The science of emotion : research and tradition in the psychology of emotions*. Upper Saddle River, NJ : Prentice Hall.
- Damasio, A. R. (1994). *Descartes' Error: Emotion, Reason and the Human Brain*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- Dunlap, K. (1922). Editor's preface. In K. Dunlap (Ed.), *The emotions* (Vol. 1, pp. 5-7). Baltimore: Williams & Wilkins Company.
- James, W. (1884). What is an Emotion? *Mind*, 9(34), 188-205. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/2246769>
- James, W. (1890). *The principles of psychology* (Vol. 2). New York: Henry Holt & Co.,
- James, W. (1894). Discussion: The physical basis of emotion. *Psychological Review*, 1(5), 516-529.
- James, W. (1981). James's preface to Ferrari's Italian translation. In *The principles of psychology* (Vol. 3, pp. 1482-1484). Cambridge, MA: Harvard University Press. (Original work published 1900)
- Lange, C. G. (1922). Om sindsbevægelser: Et psyko-fysiologisk studie [The emotions: A psychophysiological study] (I. A. Haupt, Trans.). In K. Dunlap (Ed.), *The emotions* (pp. 33-90). Baltimore: Williams & Wilkins Company. (Original work published 1885)
- Richardson, R. D. (2006). *William James: In the Maelstrom of American Modernism*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- 佐藤 俊彦 (2021a). 感情神経科学と感情心理学の先駆としての James-Lange 説 (1):「泣くから悲しい」という逆転の発想はどこから来たのか? 長野大学紀要, 43(1), 1-8.
- 佐藤 俊彦 (2021b). 感情神経科学と感情心理学の先駆としての James-Lange 説 (2): James の感情学説の原点である 1884 年の論文について 長野大学紀要, 43(2), 35-45.
- 佐藤 俊彦 (2022). 感情神経科学と感情心理学の先駆としての James-Lange 説 (3): William James は“*The Principles of Psychology*”において Lange の学説をどう受け止めたか? 長野大学紀要, 43(3), 173-181.
- Schachter, S., & Singer, J. (1962). Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, 69(5), 379-399. doi:10.1037/h0046234
- Wiens, S. (2005). Interoception in emotional experience. *Current opinion in neurology*, 18(4), 442-447. doi:10.1097/01.wco.0000168079.92106.99